

「ストリートファイター ザ・レジェンド・オブ・チュンリー」

★★★

2009（平成21）年2月17日鑑賞＜試写会・御堂会館＞

監督：アンジェイ・パートコウイアク

春麗（チュンリー）／クリスティン・クルック

パイソン（シャドルーのナンバー2）／マイケル・クラーク・ダンカン

ベガ（シャドルーを率いる男）／ニール・マクドノー

バルログ（シャドルーの仮面の暗殺者）／タブー

ナッシュ（インターポールの刑事）／クリス・クライン

元（ゲン）（チュンリーの師匠）／ロビン・ショウ

マヤ・スニー（タイ警察の女刑事）／ムーン・ブラッドグッド

カンタナ（ベガの部下の女）／何超儀（ジョージ・ホー）

シアン（チュンリーの父親）／エドモンド・チャン

2009年・アメリカ映画・99分

配給／ギャガ・コミュニケーションズ

＜戦うニューヒロイン登場！＞

アンジェリーナ・ジョリー演ずる『トゥームレイダー』シリーズ（01・03年）のララ・クロフトやミラ・ジョヴォヴィッチ演ずる『バイオハザード』シリーズ（02・04・07年）のアリス・アバーナシーなど、ハリウッドを代表する「戦うヒロイン」は今や超有名。日本では、『少林少女』（08年）で柴咲コウが、『あずみ』（03年）で上戸彩が戦うヒロインを演じたが、カッコ良さではやはり向こうが上！

そんな中、『トゥームレイダー』や『バイオハザード』と同じく、ゲームを原作としたヒロインアクションムービーの実写版が新たに登場した。そのヒロインが中国系の美女チュンリー。この手の映画では戦うヒロインをどんな女優が演じるかが最大のポイント。それが映画成功のカギを99%握るが、本作でチュンリー役に抜擢されたのは、元新体操の選手でTV界で活躍中の新進女優クリスティン・クルック。

アンジェリーナ・ジョリーやミラ・ジョヴォヴィッチほどポイン性と豊満性はない（？）が、中国系（東洋系？）の美女だけに、カンフーの腕前は超一流、そして動きはシャープで軽やかだ。ゲームにおけるチュンリーの得意技は「スピニングバードキック」らしいが、さて、それはいつ、どんな場面で炸裂？

＜チュンリーの少女時代は？＞

誕生から20年を迎える対戦型格闘ゲーム『ストリートファイター』は、全世界累計売上2500万本を超えるベストセラーゲームらしい。したがって、ゲームを楽しんだ人は誰でも登場人物やストーリーを知っているはずだが、そんなゲームには縁遠い私にはサッパリわからない。そんな初心者のために、この映画はナレーションで丁寧に教えてくれるからありがたい。

まず導入部で描かれるのは、裕福な家庭のお嬢サマとして生まれたチュンリーの少女時代。父親シアン（エドモンド・チャン）の下で愛情いっぱい育てられ、ピアニストになることを夢みて努力を続けていたチュンリーは、ある日父親がやっているカンフーの稽古を見て自分もその手ほどきを受けることに。繊細なタッチが要求されるピアニストと拳の破壊力の強化が義務づけられるカンフーの達人を両立させることは難しいと思うのだが、ゲームではそんな難しいことは誰も言わないから、何でもあり？ここで面白いのは、転勤ばかりしている父親の仕事が明かされないことだが、さてシアンの仕事は？

そんな父親がある日、闇の組織「シャドルー」のボスであるベガ（ニール・マクドノー）と、その部下であるナンバー2のパイソン（マイケル・クラーク・ダンカン）によって拉致され、以降父親の対面は叶わないことになってしまったから大変。

＜導入部だけで、期待ワクワク＞

そして今、美しく成長したチュンリーは世界的ピアニストとして有名になっていたが、自宅に戻った時病気を患っていた母親を失い独りぼっちに。そんなチュンリーがある日、古本屋街で吸いよせられるように入った一軒の店で、女主人から絵巻物を見せられ、「バンコクにいる元（ゲン）という男に会え」と言われたのが人生の転機となることに。その運命的な「お告げ」を信じて、ピアニストとしての名声も豊かな財産もすべて捨ててタイのバンコクへ行き、お嬢サマから一転して貧民街でのストリート暮らしを始めたが、いくらスラム街を歩き回ってもゲンと出会うことはできなかった。ゲンとは一体誰？そしてゲンと会うことによってチュンリーにはどんな運命が開けるの？

それはチュンリーにも全くわからなかったが、チュンリーがバンコクに向かったのは「父はきっと生きています。そしてバンコクに行けば必ず父と会える」、そう信じたからだ。美人の戦うヒロインが大好きな私は、こんな導入部だけで既に期待ワクワク・・・。

＜世界に売れるゲームだけに国際色豊か＞

この映画の舞台は香港とタイのバンコクだが、ゲームの販売対象が全世界だけに、登場人物も国際色豊か。まず、シャドルーのボスであるベガは明らかに西欧人。そしてナンバー2のパイソンは、何と『グリーンマイル』（99年）で死刑囚コフィを演じたあの黒人のマイケル・クラーク・ダンカンだ。ベガの腹心の部下兼愛人（？）のカンタナ（何超儀／ジョージ・ホー）は中国系？また、鋭いカギ爪とカッコいい白銀の仮面をかぶった暗殺者バルログ（タブー）も中国系？

他方、貧民街でのチンピラとの対決で力を使い果たして倒れ込んだチュンリーを救ったのがゲン（ロビン・ショウ）。以降ゲンとチュンリーは強い絆の師弟関係で結ばれることに。ゲンはもともとシャドルーの幹部だったが、ベガと対立して袂を分かち、今はスパイダー団（？）のボスとしてベガとシャドルー打倒を目指していた。そんなゲンも中国系？

＜ベガの狙いは？警察は？＞

ベガが目指すのは、バンコクの貧民街を大規模に地上げして、自らが支配する一大犯罪都市をつくり上げること。そのためには、対立するヤミ組織を叩き潰し、政治家や官僚を脅迫し、住民を実力で立退かせることに何の躊躇もないようだ。映画の中盤に明かされる所によれば、それは「ある儀式」によってベガの心の中から良心というものを駆逐してしまったため。

そんな大それたことを企み、着々と実行しているシャドルーになぜ警察の捜査が入らないの？いやいや、そんなことはない。地元タイ警察の美人刑事マヤ・スニー（ムーン・ブラッドグッド）やインターポールの敏腕刑事ナッシュ（クリス・クライン）らは今懸命にシャドルーの解明とベガ逮捕のための活動を続けているが、シャドルーの力は絶大らしい。そこで、警察だけに頼るわけにはいかないゲンは、どんな対抗策を？

＜父親は生きています！＞

今チュンリーはあの女主人が言っていたゲンと出会い、ゲンの下で厳しい修行に励んでいたが、そもそもそれは何のため？それは「父親はきっと生きています」と信じ、父親と再会したいためだ。そんなチュンリーに対して、ある日ゲンは「シアンは生きています。ベガに軟禁された状態で、シャドルーのために働かされている」と語った。なぜ父親はシャドルーのような悪の組織のために協力を？それはすべて、チュンリーの安全を守るためだ。

それを知ったチュンリーは「一刻も早くシアンの救出を！」と血気にはやったが、シャドルーの力の巨大さを知るゲンは「まずは怒りを鎮めることだ」と諭し、日々地味な努力を続けたが・・・。

＜邪魔者は殺せ！＞

他方、シアンの協力を得るためにずっとチュンリーを監視し、その情報をシアンに見せ続けていたベガだったが、チュンリーがすべてを捨ててバンコク入りしたため、ベガもチュンリーの情報を失うとともに、「著名ピアニスト失踪！」の新聞記事が踊ることに。そうなると、ベガはまずい。だってチュンリーの安全を保証しなければ、シャドルーのためにシアンが働かなくなるから。そこでベガが下した結論は、「一刻も早くチュンリーを見つけ出せ！」だと思ったら、何と彼が殺し屋のバルログに下した命令は「チュンリーを消せ！」だった。こんな命令を下すということは、つまりもはやシアンの使い道も賞味期限切れということだ。

他方、かつての部下だったゲンの反乱を知ったベガは、巨漢パイソンにゲンの暗殺を命じていた。そのため、ある日チュンリーが偶然隠れ家を離れた時、ゲンのいる隠れ家は吹っ飛ばされてしまったから、きっとゲンはこれにてジ・エンド・・・？またしても独りぼっちになってしまったチュンリーは、パイソンを振り返りにしたうえ、遂に単身ベガの本拠地に向かうことに。

＜やはり地元警察は頼りない？＞

昨日2月20日からアンジェリーナ・ジョリー主演の『チェンジリング』（08年）が公開されたが、そこで描かれる市長と結託したロス市警の腐敗ぶりはひどいものだった。政治権力が警察と癒着すればロクなことがないのは当然。それを熟知するベガは、自らの野望実現のために家族に対する攻撃を政治家や官僚にチラつかせることによって圧力をかけたから、彼らはイチョロ。

そのため、せっかくインターポールのナッシュ刑事とコンビを組んでシャドルーを追っていた地元タイ警察には何と捜査中止の命令が。こりゃ一体ナニ？インターポールのナッシュ刑事はなお現場に踏みとどまって頑張ると宣言したが、それまでえらくカッコいい女刑事ぶりをみせていたマヤ・スニー刑事は上からの命令である以上それに従わなければならず無念のリタイア。1920年代のロス市警と同じように、何とも地元警察は頼りないもの？

そんな中、チュンリーの単身突入を知ったナッシュ刑事は、インターポールの全力をあげてその応援に向かったが、さて地元タイ警察の再協力は？

＜ホワイトローズとは？＞

戦うヒロインには恋は似合わない。もちろん、恋のお相手はいてもいいのだが、恋愛に割く時間とエネルギーはほどほどに、自分に与えられた任務のために働くのがカッコいい戦うヒロインだ。この映画におけるチュンリーの敵は、父親を拉致し殺害したヤミの組織シャドルーとそのボスのベガ。したがって、見どころの第1は、ゲンの指導よろしきを得てカンフーの腕が格段に上達したチュンリーとベガとのカンフー対決。そして第2は、娘と父親との愛情と信頼の展開模様。

そこまでは誰でもわかるのだが、この映画の面白いところは、自らの野望と引換えに良心まで捨て去ったベガも愛する娘がいるらしいこと。映画の中盤からさかんに「ホワイトローズ」という言葉が出てくるが、これは一体何？それが、この映画の終盤に訪れる怒濤のクライマックスのキーワードになるから、注目！

2009（平成21）年2月21日記